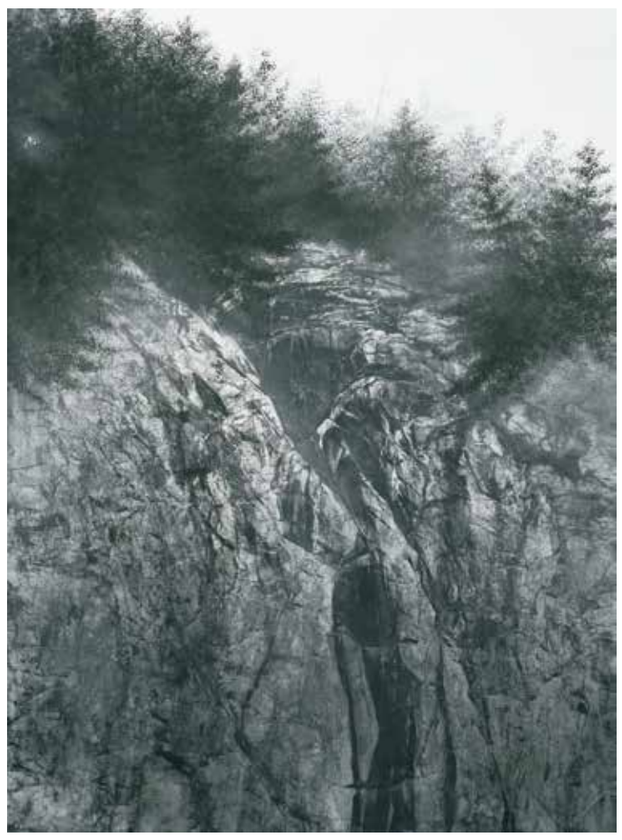
新美術新聞
The Shin Bijutsu Shinbun —— Since 1971
9/1 500円（税込） SEPTEMBER 2020
(株)美術年鑑社
発行所：〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-3 電話：03-3295-1635
発行人：油井一人 編集人：油井一八
E-mail：shinbun@art-news.co.jp

本号の主な記事

1面 第1回三越伊勢丹 千住博日本画大賞決定
2面 新美術時評 馬渕明子
美・友・人 押元一敏
From NEW YORK 富井玲子
〈秋の公募展〉改組新第7回日展審査員発表
3面 青春プレイバック 万代進 空庵
フェイス21世紀 吉澤光子
画材考㊱ 山口暁子
街角アート 星野清一
4面 大樋焼 父子三代展
無窮の会 Trilogy vol.2
5面 特集 作品保管・管理アンケート

第1回 三越伊勢丹・千住博日本画大賞 決定

大賞に全民玉氏



千住博《断崖図》2020年 130.3×97.0㎝
雲肌麻紙、プラチナ泥（三千本膠）、天然岩黒（ラスコーマットメディウム、三千本膠）

今一度「日本画とは何か？」を問う

入選・入賞は20作品 厳選

未来に向けた日本画の在り方を問い直す公募展「第1回三越伊勢丹・千住博大賞展」が8月26日(水)開幕し、8月31日(月)までの会期で、日本橋三越本店本館6階美術特選画廊において開催された。規定枠50号大とした今回の応募総数は全国から2000を超え、倍率10倍の中から選出された入選作は20作品のみ、稀にみる激戦コンクールとなった。厳正な審査の結果、入選20が決まり、大賞など受賞3作品は開幕初日会場で発表された。

展覧会は各入選作家による未発表新作50号と10号小品、さらに審査にあたった千住氏の賛助出品60号新作《断崖図》が展示された。

新たな公募コンペに審査員として迎えられた千住博氏に大賞展の意義、未来に向けた日本画の在り方、新型コロナ禍の時代を芸術家はどうあるべきか、一問一答でお聞きした。

——改めて日本橋三越本店美術部とタッグを組まれ、実現した「大賞展」の意義をお聞きします。

千住博（以下、千住） 戦前の横山大観、戦後では東山魁夷先生ら近代・現代の美術史に残る日本画壇の巨匠の先生方は共通して高い評価とともに、また異論を唱えられてきた厳しい歴史もお持ちです。日本画の定義のあいまいさによるものでもありましたが、しかし、むしろそのことが後になって多様で多彩な日本絵画の発展の土壌となって行きました。その主な活躍の舞台であった三越本店美術画廊が、これから共に歩んでいく日本画と出会いたいと企画されたのがこの「大賞展」でした。

——200点超の応募作品から20点に絞る審査を終えられての感想をお聞かせください。

千住 たった20作しか入選しないのですが、素晴らしい作品が多数揃いました。1週間に及んだ審査は激烈でした。結局絞り込んだ30作品くらいは、どれが入ってもそれなりの理由があるという所まで審査は難航しました。長年お客様に最高の作品を提供してきた、経験豊かな三越美術部長やバイヤーの目も厳しく、それぞれの見方や意見もあって最終の入選は終わる寸前に最後の数作を入れ替えたほどです。

作品にまず絵にしたくなるような感動があって如何にそれを真摯に伝えようとしているか、小手先でなく作者の人生の確かさがそこにあるのか等が問われました。

——応募入選者を拝見しても幅広く、出身大学や公募団体なども多岐にわたっていますね。

千住 もともと日本文化の源流は中国、韓半島を経て伝播してきました。大戦の前後は欧米の美術に大きな影響を受けました。日本美術の根幹は多様性や国際性です。日本の中には世界の文化が底流にあるのです。今回「あなたにとって日本画とは何か？」の問いかけを出しています。出品者はそれぞれの答えをここに出しています。

——大賞展は全く予期せぬ新型コロナのパンデミック（世界的大流行）と重なりました。

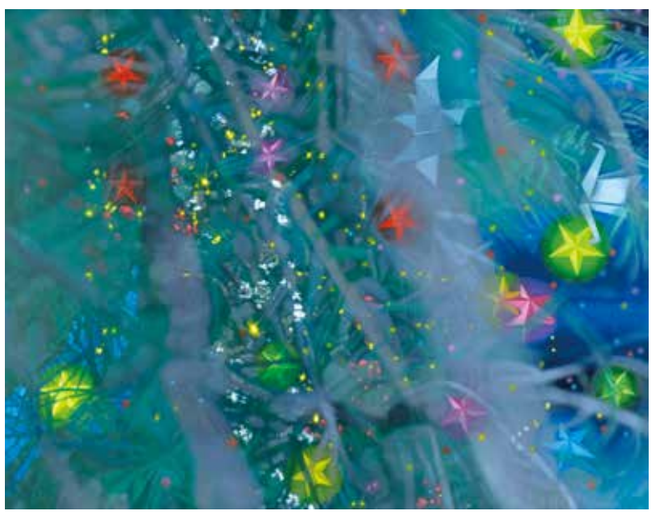
千住 貴紙の特集連載「美術の今—我々はコロナ禍から何を得るのか」を興味深く拝読しました。その中でも現代の巨匠の先生方のアンケートの文章には納得し、教えられました。先生方はしっかりと制作の日々を過ごされておられました。考えてみますと疫病大流行後のルネサンス期や第2次世界大戦の頃でも画家たち芸術家は不安感を打破しようとする中で傑作を遺しました。こんな騒然とした中、落ち着いて制作できないというならそれまでです。逆境のなか自分の生きる証し、痕跡を刻みたいと思う芸術家たちによって美術史は築かれてきました。今、それが私たちの番なのです。

——入選作・受賞作について。

千住 入選の20作品は緊張感があり誠実に正直に描いているのが伺えます。入選落選は最終的には世界観の強度の差だと思います。花や雪景色、水墨などそれぞれの方向性の中でベストが一堂にそろいました。それをどちらが良いかと比べることはできません。ですから受賞作はいかに切り口の独創性を人々に示せるか。そしてこんな可能性がある、と具体的に多くの人々に影響を与えることができるかが問われました。すばらしい作品を出品してくださった皆さんに心より感謝します。

——賛助出品の新作《断崖図》、日本画の素材についても一言お願いします。

千住 これは語り出すと大きなテーマになるのですが。画家は道具を通して考えます。そして和紙とは日本文化そのものなのです。だから今一度、もみ紙を通して和紙にしっかり向き合おうと思ったのです。紙をもんで、山あり谷ありの起伏を画面に創り出し、絵の具を流すと、彫刻や立体造形というジャンルとの境界も越えていくのではないかと感じます。日本画の越境的可能性を確信しました。道具としての和紙や岩絵の具、筆や刷毛が日本画の可能性を気付かせてくれると思います。それが今も昔も画家たちの実感なのではないでしょうか。



大賞（千住博賞） 全 民玉《不確かな世界—落ちた星—》

1980年 東京都生まれ
2008年 東京藝術大学大学院 美術研究科絵画専攻 修士課程修了
2019年 第2回枕崎国際芸術賞展 大賞

【作品評】
描かれているのは、クリスマスツリーなのだろうか。それが水面に反射している。
区別のつきにくい水鏡の虚実の光景に接して、心によぎるかすかなざわつきを感じた作者は、ゆらぎの治まった水に映り込む華やかさの奥底に、ひっそりと潜む不確かさを見たのだろう。
そして見失わないように目をこらし、再びゆらぎの隙間に逃げ込んでしまったその正体を掴み取ろうと凝視していたのだろうか。
複雑で、研ぎ澄まされた、絵画の可能性を押し広げた傑作だと思った。

準大賞（三越伊勢丹賞） 吉岡由美子《地磁気》

東京都生まれ
2003年 武蔵野美術大学 造形学部卒業
2019年 京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）大学院 芸術研究科 修士課程修了
第3回国際芸術コンペティション・アートオリンピア2019 優秀賞

【作品評】
一瞬の爆風で吹き飛ぶ桜、鳥、枝。背景は、鉛色の閉鎖空間だ。
原子力の時代、現代人の心に通奏低音のように潜む晴れない閉塞感。
不安感の吐露が美しければ、美しい人生を生きてきたことの証にもなる。
質感、空間ともに迫真性に満ちていて見事というほかない。
作者は、鉛筆で背景を、字を書くように描いている。
一瞬一瞬、24時間を生きていることを刻むように。
完成度は高く、リリカルで、しかも力強い。ここに絵画の一つの到達点がある。

三越美術部賞 大浦雅臣《Hopes》

1977年 東京都生まれ
2005年 武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻日本画コース修了

【作品評】
作品はいつも挑戦的で、大胆で、積極的に発信していて、将来が楽しみな逸材だ。
使う黒が、強くていい。独特の世界観を、多くの人が注目している。
ほとばしるエネルギーが見るものを引きつける。
柔らかい表情を部分的に持てば、更に幅広く、対比が饒舌になるかもしれない。
技法や素材に柔軟に対処し、張りのある強さに加え、様々なしなやかさをハイブリッドで取り入れて、堂々と画業を突き進んでほしい。

※【作品評】はいずれも千住博氏による

第1回 三越伊勢丹・千住博日本画大賞展入選者

青木秀明	Aoki Hideaki	《孔雀図 —荘厳極まり—》
安藤緋那	Ando Hina	《菊理媛命》
王 青	Oh Sei	《夜の地鉄》
大浦雅臣	Oura Masaomi	《Hopes》
開藤菜々子	Kaito Nanako	《うつろふ》
笠井 遥	Kasai Haruka	《はなつ》
川上椰乃子	Kawakami Yashinoko	《嵐が来る日》
甲村有未菜	Koumura Yumina	《Sea of memory》
全 民玉	Choun Minok	《不確かな世界 —落ちた星—》
津田親重	Tsuda Chikashige	《雪解》
中村貴弥	Nakamura Takaya	《富士結晶山景図 —標の道—》
並木 功	Namiki Isao	《海洋 mandala》
西川礼華	Nishikawa Ayaka	《共通言語》
野村京香	Nomura Kyoka	《道》
廣瀬佐紀子	Hirose Sakiko	《岩陵》
深作秀春	Fukasaku Hideharu	《難破船》
三浦春雨	Miura Harusame	《betweens》
楊 喩淇	You Yuki	《夜の隅》
吉岡由美子	Yoshioka Yumiko	《地磁気》
吉田幸紘	Yoshida Yukihiro	《一月在天》

（50音順）

—カタログ掲載メッセージ—

「世界表現としての20の提言」

千住 博

応募してきた作品に対し、私は、それが日本画か、日本画ではないかを問うことはしなかった。

ただ長年の経験を踏まえ、それが芸術であるかどうかの一点のみで、判断を重ねた。

すなわち、まず作品が生きる作者の等身大の身体性を備えているか？

伝えたい新鮮なリアリティ、感動はあるか？

ということだ。

それに加え、コロナによる新しい時代に生まれる新潮流であってほしいと考えた。

私達は今時代の分水嶺を生きている。

必要なのは、境界線を渡り、新しい地平に踏み出す自覚だ。

世の中には、デジタル、オンライン化で今までとは違う社会が出現しつつある。

今のデジタルは、人間の五感に対応してない。

デジタルは大切なツールだ。しかし、デジタルだけでは人は生きていけない。

デジタルでは表せないことを補完する形で、芸術は今後展開してゆくことになる。

芸術とは、本来、時代の欠如を指摘し、欠落した人間らしさを取り戻す社会的意識により成立している。

だから今後、生きている痕跡や素材に対する敬意、アルゴリズムで表せない意外性が大切になっていくと私は思っている。

言うまでもなく、作者の出自も技法も関係ない。

日本美術でこれが問われたことは一度たりとてない。

シルクロードから渡ってきた大陸文化が日本文化の形成に多大な影響を及ぼし、戦前はパリの、そして戦後はアメリカ美術によって日本の美術は大きな地殻変動を受け、今の形になっていった。

そもそも日本文化は多様性、国際性によって成り立っている。

日本の中に世界はあり、世界の中に、日本文化の源流はある。

そして元来芸術とは、「私達」が生きているこの世界とはどのような世界か、という問いかけだ。

「私」ではない。「私達」という複数人称だ。

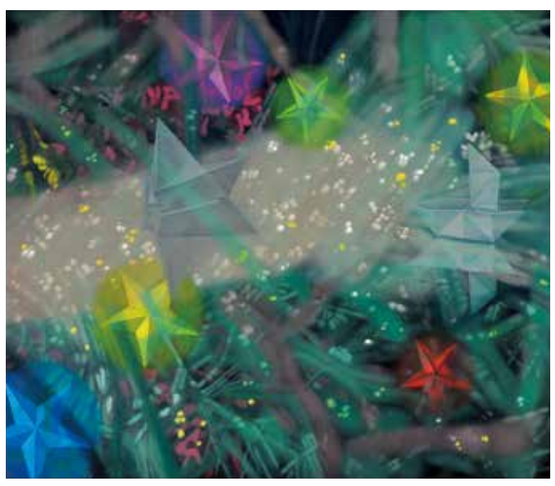
「自己表現」でもない。

自己表現はエゴの世界に行き尽く。エゴは芸術の対極だ。

等伯も北斎もモネもゴッホも、ウォーホルもボルタンスキーも、私達はこのような世界に生きている、どうだろうかという「世界表現」だ。

そのようなことを念頭に置き、いくつもの素晴らしい作品と出合うことができた。

ここに寄せられた20の世界観に、私は、等しく高くリスペクトを払っている。



全 民玉《不確かな世界—天の川—》2020年 45.5×53.0㎝

三越伊勢丹
千住博
HIROSHI SENJU
日本画大賞

第1回

会期・会場
2020年 8月26日(水)～31日(月)
午前10時～午後7時 ※最終日は午後5時閉場
日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

切り口の独創性で時代を先導する
新しい日本画をご覧ください。

【協力】株式会社 新生堂

MITSUKOSHI
日本橋本店 〒103-8001 東京都中央区日本橋室町1-4-1
電話/03-3241-3311(大代表) www.mitsukoshi.co.jp